花 FLOWER

姿・色・香り…魅力満開

人の生活に欠かせない存在として愛され続けてきた花。その魅力あふれる世界を紹介する「特別展 花 FLOWER～太古の花から青いバラまで～」が24日、東京・上野の国立科学博物館で開幕します。花の誕生や進化の過程、文化史をたどり、最新の科学研究の成果を紹介するほか、いけばなやフラワーアレンジメントなど多種多彩な生花を展示。色や姿、香りを楽しみながら、花の魅力に迫ってみませんか。

縄文期から花を愛した日本人

東京農業大学教授
湯浅 浩史

いったい人はいつから花を愛で始めたのか。人類最初の花の利用は6万年前のネアンデルタール人とみられる。イラク北部の洞窟遺跡の花粉分析から、ヤグルマギクやノコギリソウなどを死者に手向けたと、発掘した専門家はいう。

日本人が花を認識し、栽培を始めたのは縄文早期にさかのぼる。アフリカ原産のヒョウタンが9600年前の琵琶湖の粟津湖底遺跡などから出土した。ヒョウタンの花は雌花にのみ果実がなる。自然と花は意識されていたであろう。

野の花を庭に移植、観賞した事例は『万葉集』に初めてみられる。大伴家持は「夏の野のさゆり引き植ゑて」と詠む（巻18－4113）。越中での単身赴任で、寂しさのなぐさめに花を育てた。

11世紀初頭の『枕草子』では木竹61種類、草本類77種類の計138種類が登場する。『源氏物語』（54帖）は1帖から10帖のうち九つに植物に関する名がつけられ、植物が人名にシンボリックに表されている。登場する木竹は57種類、草本類は54種類で計111種類に及ぶ。

重複を除いた両方の合計は163種類になり、これは数百人が詠んだ『万葉集』の植物の種類数と奇しくも一致する。また、植物は観賞栽培だけでなく十二単や襲などの色合いにも採り入れられた。

花の栽培、育成が盛んになったのは江戸時代。家康も花好きだったようで、江戸城の吹上に花畑を作り、島津家久からハイビスカスやマツリカが贈られた。二代将軍秀忠も「花癖あり」と言われるほどで、そのころツバキ熱が高まり『百椿集』（1630年）が出た。

以降、ツツジ、サツキ、サクラ、カエデ、ナデシコ、ハナショウブ、サクラソウなど日本原産の花に加え、アサガオやキクも爆発的に品種分化が起こった。

また、斑入りなど観葉植物もヨーロッパや中国に先駆けて流行し、江戸時代後期には3千種にも達したという。江戸時代の日本の花は、シーボルトを始めとする西欧の学者を驚かせた。

現代、世界中で人は花と交流する。なかでも野の花、山の花を愛でる心は、日本人に根強い。

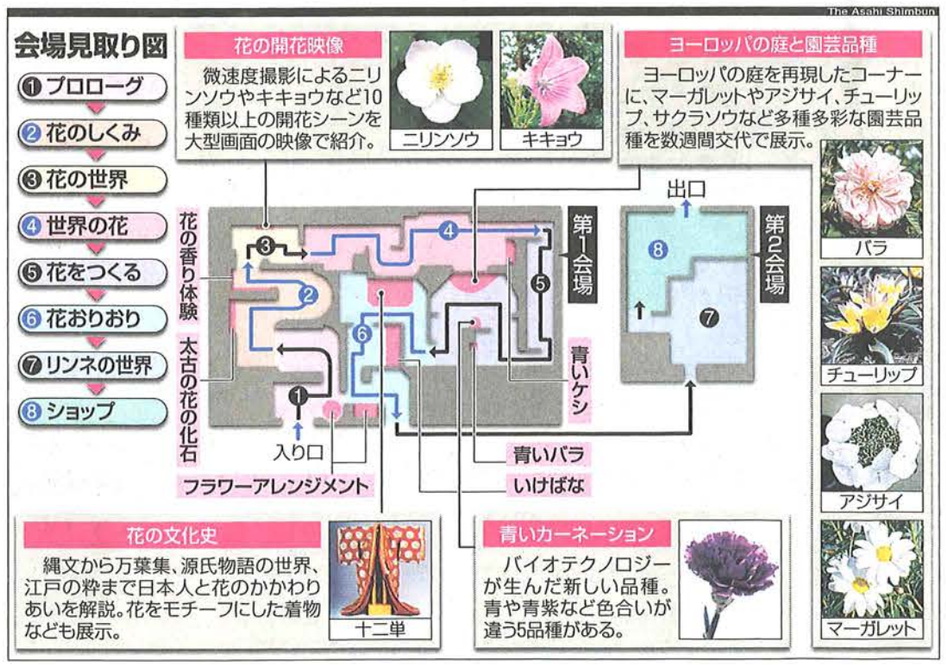
「不可能」咲いた

青いバラ

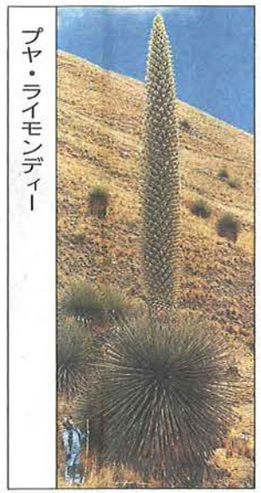
「不可能なもの」。英和辞典で「青いバラ」を引くと、こう定義されている。昔から青いバラは育種家の夢だったが、いくら交配を重ねて挑戦しても失敗の連続。こうして「青いバラ」は「不可能」の代名詞になったといわれる。

ところが、サントリーとオーストラリアのバイオ企業が90年から青いバラの共同開発に取り組み、04年に成功した＝写真、サントリー提供。最先端のバイオテクノロジーで「不可能」を実現させた。

開発に携わったサントリー先進コア技術研究所の田中良和さんは「バラに新しい青の色素が加わり、将来はバラの色がもっと多彩になることが期待される」と語る。



ミジンコウキクサ


プヤ・ライモンディー

スマトラオオコンニャク

キソウテンガイ

ラフレシア

「ヒマラヤの青いケシ」

最大 右上
スマトラ島やボルネオ島などに分布する世界最大の花。大きなものは直径60～90㌢に育つ。茎も葉もなく、つぼみが地表に顔を出して開花する。実物を樹脂で固めた標本を展示。写真は武蔵野良治さん提供。

最大の花序 中上
世界最大の花序（花の集まり）をつけるスマトラ島の植物。高さ3㍍に育つものもある。20年ほどで塊茎（イモの部分）が大きくなり開花する。葉の実物と花序の模型を展示。

最小 左上
根がなく、葉と茎の区別もない1㍉未満の葉状体が世界最小の花を咲かせる。0・1～0・2㍉の雄花と雌花1個ずつの花序をつける。アフリカやアジアなどに分布。模型を展示。

究極の青 右下
ほとんどがヒマラヤ山脈を中心に標高3千～5千㍍の高山帯に分布する。学名はメコノプシス。その青色は青空を切り取ったような「究極の青」といわれる。北海道小樽市などで栽培に成功している。実物を展示。

その名の通り 中下
数メートルに及ぶ多数の葉を広げたような珍しい形態から、その名がつけられた。葉が無限に伸び続け、開花まで20年以上かかる。アフリカのナミブ砂漠に自生。実物と模型を展示。

ノッポ 左下
南米アンデス山脈の半砂漠地帯で育ち、世界一背の高い花序をつける。最大で10㍍ほどの茎に、芽生えから開花まで80年以上かけて、多数の白い花が咲く。標本を展示。